

Title	サルトルの「超越」
Author(s)	加藤, 俊史
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1980, 13, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12152
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

サルトルの「超越」

加藤 俊 史

一、指向性

サルトルの現象学的存在論の根本概念は、「指向性」(intentionnalité)である。サルトルの現象学的存在論には、デカルト以来の近代二元論の超克、近代二元論のヴァリエーションとしての観念論と实在論との同時的超克の野心が見られるが、この野心の現実化を動機づけたのが、フッサールの現象学の根本概念である「指向性」であった。そして、この「指向性」は、サルトルの現象学的存在論の根本概念となった。しかるに、この意識の指向性の概念、すなわち「あらゆる意識は、何ものかについての意識である」という命題は、いささか曖昧であつて、まったく相矛盾する意味をになわせることを可能とするものであるゆえに、まずサルトルの指向性の概念がいかなる意味をになつていいのか、またそれがいかなる思想を含蓄するものであるのかを検討する。

意識の指向性が顕示されるのは、「反省」の平面においてである。この反省の方法は、フッサールの超越論的現象学の現象学的還元の根本的方法である。一方、サルトルの現象学的存在論においては、いわば「現象学的還元」

に相当するものほとりもなわずこの反省の方法を施行することに他ならないのであるが、サルトルがフッサールの還元の理論を積極的に受容しなかつたのは、サルトルがフッサールの超越論的觀念論を忌避したからであつた。サルトルの現象学的存在論においては、反省的意識（反省はそれ自身ひとつの意識である）に主題として与えられているものは、「超越論的主観性の領野」⁽¹⁾というものではなかつたのである。また、『存在と無』におけるサルトルは、この「反省」に特権的地位を与へはしない。サルトルは、「反省される意識に対する反省のいかなる種類の優位も存在しない。反省が、反省される意識を、それ自身に対して顯示するのではない。」⁽²⁾と言っている。サルトルの現象学的存在論においては、特権的地位にある認識主観としての反省的意識によつて把えられた超越論的主観性の領野についての記述というような立場は、認識の理論的優位という錯覚として却けられるのである。サルトルは上記の言葉に続いて、「まったく反対に、非反省的意識が反省を可能ならしめるのである。」⁽³⁾と言っている。サルトルは、むしろ反省の可能性の条件を求め、反省に対する反省以前のなコギトの存在論的優位を主張するのである。それにしても、意識の指向性が顯示されるのは、反省の水準においてであろう。反省的意識に現前するものは、私の意識である。言いかえればコギトである。コギトがサルトルの現象学的存在論の出発点である。また、コギトから完全に離れることもない。ハイデッガーの「存在」を希求することはない。サルトルのコギトの直接的源流はフッサールのコギトであるが、その最初の源泉は近代哲学の創始者デカルトのコギトであることは明白である。したがつて、サルトルの存在論が、コギトから出発するかぎりにおいては近代哲学の枠組から出るものでないことは、言うまでもない。しかし、コギトの哲学であることを以つて、サルトルの存在論を近代主義であると断ずるわけにはいかないのである。サルトルは言う。「コギトは、ひき渡すことを求められるものをしか、ひき渡さない。」⁽⁴⁾サ

ルトルがコギトから出発して求めたものは、思惟実体、純粹認識主観、超越論的主観性の領野というようなものではなかった。サルトルによれば、諸々の近代的主観は擬物論的錯覚 (illusion chosiste) から生じたものである。

『存在と無』は、積極的には人間存在の存在論であるが、その裏に擬物論的錯覚から生じた諸々の近代的主観に対する批判を内包するものである。ところで、サルトルがコギトから出発して求めたものは、意識の指向性を根底に置く、意識の可能性の条件としての「人間的現実」(réalité humaine) の存在論的分析であった。(サルトルから見れば、サルトルの現象学的哲学の二人の師のうち、フッサールはコギトから出発したがコギトのうちに閉じ込めてしまったのであり、ハイデッガーはコギトを欠落させたまま現存在の分析を遂行したのである。)⁽⁵⁾

さて、サルトルの現象学的存在論において意識の指向性はいかなる意味をになっているのであろうか。一言を以って言えば、それは「超越」(transcendance) を意味する。サルトルにとっては、意識の指向性は、超越論的領野における関係、あるいは内在における関係を、意味するものではなかった。反対に、意識の指向性は、内在性の神話からの解放を動機づけるものであった。また、それは、観念と事物、現象と本体の二元性の超克を意味するものであった。サルトルにとっては、意識の指向性は、相互に異なる二つの存在を要求する原初的關係、超越的關係を意味するものであった。この二つの存在とは「意識の存在」⁽⁶⁾と「現象の存在」⁽⁶⁾とである。サルトルは、意識の存在をば対自存在と、現象の存在をば即自存在と名づけて、それらを「絶対的に切り離された存在領域」として分析している。そして、『存在と無』は、その標題が示すように、対自存在(≡無)と即自存在(≡存在)との存在關係を問題として立てた存在論である。しかし、対自存在と即自存在とが、まずそれぞれ「孤立したもの」として定立されて、しかる後にそれらの存在關係が問題として立てられていると、解釈するならば、(サルトルの存在論は

「二元論である」と誤解することになる。反対に、超越の關係こそが原初的な (primitive) ものである。サルトルの存在論は、「超越の哲学」⁽⁷⁾である。

サルトルは、意識の指向性について次のように述べている。「フッサールの示したところによれば、あらゆる意識は、何ものかについて、意識である。その意味は、超越的対象の措定でないような意識は存在しないということである。あるいは、言つてよければ、意識は何らの《内容》をもたないということである」⁽⁸⁾。ところで、サルトルは、この指向的意識に或る「自発的な意識」(意識の意識)が構成的なものとして伴うことを主張する。「対象についてのあらゆる措定的意識は、同時に、それ自身についての非措定的意識である」⁽⁹⁾。この自己についての非措定的意識は、「ひとつの新しい意識」⁽¹⁰⁾ではなくて、「何ものかについての意識にとつて、唯一の可能な存在のしかた」⁽¹⁰⁾である。それはまた、非措定的な「存在(についての)意識」⁽¹¹⁾である。サルトルは、デカルト的な反省によつてではなくて、この自己についての非措定的意識から、意識の可能性の条件としての超現象的な「意識の存在」を、確認する。簡単に言えば、現われることができるためには、それに対して現われが現われるところの存在がなければならず、そして意識はこの存在について非措定的な意識を持つていと、いうことである。しかしながら、「意識は何ら実体的なものをもっていない。それは、それがあらわれるかぎりにおいてしか存在しないという意味で、純然たる一つの《現われ》である」⁽¹²⁾。

サルトルは、この「意識の存在」と平行して「現象の存在」を確認する。——現象の背後に隠れていてわれわれが決して知ることのできない《本体的存在》について言えば、これは信仰の問題である。それは、《隠れたる神》が信仰の問題であるのと同様である。サルトルは、端的に信じないことによつて、このような《本体的存在》から、

したがって不可知論的現象論におけるような現象と本体的存在との二元論から、解放される。サルトルの存在概念は、〈本体的存在〉とは無縁のものである。また現象概念も、〈本体的存在〉を信じないことによって、現象論における現象概念と異なるものとなる。「ひとたびわれわれがニーチェのいわゆる《背後世界の錯覚》から脱却して、現われの背後にある存在をもちや信じないならば、現われは、逆に、全き確実性となる。その本質は《現われること》であり、これは存在と対立するどころか、かえって存在の尺度となる。」⁽¹³⁾したがって、サルトルにとって、現象は存在者であり、存在者は現象である。そしてここにおいて問題の対象である「存在」は、この現象の存在であり、存在者の存在である。ところで、一方われわれは、存在論以前の存在了解をもっている。サルトルは、この存在論以前の存在了解を次のように表現する。「存在は、何らかの直接的な接近、たとえば倦怠とか嘔き気といったようなしかたで、われわれの前にあらわにされるであろう。」⁽¹⁴⁾(存在論が可能であるのはこの存在論以前の存在了解を条件としてである)存在は現象する。しかし、これは「存在現象」であって、「存在」については新たにこの「存在現象」の、「存在」が問題となり、「現象の存在は存在現象に還元され得ない」⁽¹⁵⁾のである。また、独我論的観念論(現象の背後の本体的存在を却ける点では、サルトルの現象学的存在論と同じ)がなしたように、「現象の存在」を被知覚に還元するわけにもいかない。「相対性と受動性、この両者が存在が被知覚に還元されるかぎりにおいて、存在の特徴的な構造であるということになる。」⁽¹⁶⁾しかるに「相対性と受動性というこの二つの規定は、存在のしかたにかかわるものであって、いかなる場合にも存在そのものには適用されえないであろう。」⁽¹⁷⁾したがって「現象の存在はその被知覚ではありえないであろう。」⁽¹⁸⁾存在が被知覚であるならば、存在は純粹な内在であることとなる。このような考えは、サルトルが内在論的錯覚 (illusion d'immanence) と呼ぶものの極限である。こ

の内在論的錯覚を打破する理論を動機づけたのが、「意識の指向性」の概念であった。「意識の指向性」の概念に基づいて、「現象の存在」の超現象性が確認される。

「あらゆる意識は何ものかについて、意識である。意識のこの定義は、まったく違った二つの意味に解せられよう。一つは、意識はその対象の存在にとつて構成的なものであるという意味に解せられる場合であり、いま一つは、意識はその最も深い本性において一つの超越的な存在に対する関係であるという意味に解せられる場合である。」⁽¹⁹⁾ここにあげられた二つの指向性の概念のうち、前者はサルトルの解釈したフッサールの「指向性」の意味であり、後者はサルトル自身の「指向性」の意味である。サルトルは、自らの「超越の哲学」を理論化する根本概念としてフッサールの現象学の「指向性」を発見したのであって、フッサールのように諸科学の基礎づけをまくるものではなかったのであるから、フッサールの認識論の根本概念としての「指向性」と自らの存在論的分析の根本概念としての「指向性」とを峻別しなければならなかったのは、当然のことであった。フッサールには、多少とも指向の対象は内在的对象であるという考えがあつた。フッサールのこの内在的对象は超越的对象と区別されるものではなかったのだから、フッサールが内在論的錯覚に陥っているとは言えないだろう。しかし、内在的且つ超越的对象とはいかにも矛盾した概念である。またフッサールの「指向性」および「超越」の概念は多分に認識論的概念であつた。それに対してサルトルにとつては、「指向性」は一つの存在といま一つの存在との関係を示すものでなければならなかつた。それこそが、サルトルの関心事であつたのであるから。したがつて、サルトルにとつて、「意識の指向性」の概念は、「超越が意識の構成的構造である」ということ⁽²⁰⁾、「何ものかをすなわち一つの超越的な存在を顕示する直観であらねばならない」というこの明瞭な義務をよそにしては、意識にとつて、いかなる存在も

ない⁽²¹⁾」ということ、「意識はその存在において一つの非意識的な超現象的な存在を巻きぞえにする⁽²¹⁾」ことを、意味するものである。すなわちサルトルは、存在論的証明によって、現象の存在を確認するのである。意識そのものが、現象の超現象的存在を意識の存立にとって必然的に要求するということである。(したがって、対象が「射影」をもつて与えられるが故に対象は超越的である、というのではない)かくして、超現象的なものとして、現象の存在が確認された。

かくして、サルトルは、現象が二つの超現象的な存在すなわち意識の存在(≡対自存在)と現象の存在(≡即自存在)とを要求することを、確認した。「意識の指向性」は、絶対的に切り離された二つの存在領域の根源的關係である。「超越」を、指し示した。

次いで、サルトルの「超越」の概念がいかなる思想を含蓄するものであるかを、検討することにしよう。

(なお、本稿においては、サルトルが分離した二つの存在領域の指向関係のみを主題としている。存在が対自存在と即自存在とに分離されることによって、当然のこととしてその指向関係と同時に存在関係が問題となる。それが、大部な存在論的分析の内容であるが、本稿においてはそれに触れない。)⁽²²⁾

二、超越

一九三三年の秋、サルトルはベルリンに留学し、現象学の諸著作を読む。そして現象学との出遭いに感激したのである。自分の思想を展開する基盤をそこに発見したからであろう。「感激をもってフッサールの現象学を発見したまさしくその時に⁽²³⁾」書かれた「フッサールの現象学の根本観念、指向性」と題する短い《論評》がある。これは、

サルトルの「独創的な哲学的表現の処女作」⁽²³⁾であるだけには及ばないものである。ここにおいて、サルトルはフッサールの指向性概念を絶讃し、指向性を「意識の意識自身による超出 (dépassement)」と既に解釈している。(サルトルにおいて「超出」は「超越」としばしば同じ概念である。)この論評は、フッサールの指向性概念の忠実な解説であるよりも、むしろサルトルが現象学発見以前より抱いており後に『存在と無』において存在論として結実するサルトル自身の超越の思想を、フッサールの「指向性」に投影したものであると、思われる。サルトルは程なく、自分の思想とフッサールの思想との隔りを悟つたに違いない。翌年未だベルリン滞在中に書かれた『自我の超越』においてフッサールを讃えながらもすでに批判しなければならず、数年後の『存在と無』において、『論評』においては絶讃したフッサールの指向性概念を自分の指向性概念から峻別しなければならなかった。

《論評》の冒頭は次の如くである。

「《彼は彼女を眼で食べた》こうした句やその他多くの表徴が、認識することは食うことだという実在論と観念論とに共通の錯覚を、十分示している。フランスの哲学は、百年のアカデミスムをへて、なおまだこの段階にあるわれわれは誰もみな、ブランシユヴィックや、ラランドや、メイエルソンを読み、《精神Ⅱ蜘蛛》が物を蜘蛛の巣の中にひっぱりこみ、白いよだれで包み、ゆつくりと呑みこみ、自分自身の血肉に化するものと、思いこんだものだ。机とは、岩とは、家とは、何か? 《意識内容》の或る集合体、それらの内容の或る秩序である、と。おお、なんとこの栄養消化の哲学であることか!」⁽²⁴⁾

このサルトルの「処女作」の冒頭の文章が既に、『自我の超越』に始まって『存在と無』までをつらぬくサルトル哲学の方向を表明していると思われる。ここで、「栄養消化の哲学」と言われているものは、後に「内在論的

錯覚」と論難されるようになる。サルトルは、現象学の発見以前において、内在論的錯覚に陥った實在論・観念論を超越して、「超越の哲学」を確立したいと考えていたのであろう。だから、「感激をもって現象学を発見したまさしくその時に」、自分自身の超越の思想を、フッサールの指向性概念に投影したのであろう。もし、そうであるならば、サルトルその人においては、「超越」の思想が「指向性」に先行することになる。サルトルは、現象学に出遭うことによって、その超越の思想を理論化する道を見出したということになる。上記のことからは推測にすぎないが事実はどうであれ、サルトル哲学の出発点であり根本概念である「指向性」が含意するところの超越の思想が、『自我の超越』から『存在と無』までをたらぬ根源的思想であるように思われるのである。

さて、サルトルの「超越」が、ネガティヴに含意するところのものは、近代哲学が陥っている内在論的錯覚⁽²⁵⁾および擬物論的錯覚⁽²⁶⁾に対する批判である。内在論的錯覚とは、意識を容器の如きものとみなして「観念」あるいは「イメージ」と名づけられるような「意識内容」が意識の内に存するとする考え方であり、擬物論的錯覚とは、意識に事物の性格を附与して意識に不透明性を持ちこむ考え方である。これらは同一の錯覚の二面であり、対象については内在論的錯覚となり、意識については擬物論的錯覚となる。そして、内在論的錯覚に対する批判を明確に示すかたちで、超越の思想がポジティヴに展開されたのが、『イマジネール』であり、擬物論的錯覚に対する批判を明確に示すかたちで、超越の思想がポジティヴに展開されたのが、『自我の超越』である。

非現実的対象物の超越性。——一見したところあたかもサルトルの超越の思想を瓦解させるかに思われる型の意識がある。それは想像(imagination)である。われわれは何ものかのイマジジュを思い浮かべることができる。この対象物イマジジュは純粹に内在であると。これこそが、サルトルが「内在論的錯覚」と呼ぶところのもので

ある。想像意識は、超越の思想を瓦解させるどころか、「實在論と観念論とに共通の」「内在論的錯覚」の秘密を暴露し、内在論的哲学に対抗する「超越の哲学」を浮き彫りにすることを可能にしてくれる意識である。サルトルが、フッサールから学んだ方法を駆使して、想像意識の現象学に取り組んだのは、蓋し当然のことであった。

『イマジネール』に先立って書かれた『想像』において、サルトルは擬物論的錯覚に陥った近代哲学および実証的心理学における「イマジユ」についての理論を批判する。諸々の近代哲学にしろ実証的心理学にしろ、イマジユを一種の惰性的な即自的に存在するものとみなし、すなわちイマジユに事物の性格を附与して来たのである（擬物論的錯覚）。そしてそれらのすべてに共通するわけではないが、イマジユとは「意識内容」すなわち意識の中にある心的対象物であった（内在論的錯覚）。しかし、イマジユの意識についての反省は、イマジユがそのようなものであることを示さない。サルトルが、古典的な「イマジユ」の概念を振り払い、イマジユの意識についての反省のみから得る結論はこうである。「意識の中にはイマジユはないし、イマジユはあり得ないであろう。そうではなくてイマジユとは意識の或る型なのだ。イマジユとは作用であつて事物ではない。イマジユとは何ものかについての意識である。」⁽²⁷⁾ それでは何故に、「心理学者たちや哲学者たちの大部分が採用して来た」⁽²⁸⁾ 観点や「常識の観点」⁽²⁸⁾は擬物論的錯覚に陥つたのか。サルトルは、「常識の観点」が擬物論的錯覚に陥る様を次のように説明する。「イマジユとしてのイマジユの純粹な観想から精神をそむけるや否や、つまり諸々のイマジユを形成することなしにイマジユについて考えるや否や、地すべり現象が生じて、イマジユと対象物の本質の同一性の確認から、存在の同一性の確認へと移行することになる。イマジユとはすなわち対象物であるが故に、そのことからイマジユは対象物として存在するのだと結論される。……イマジユを、それ自身ひとつの事物と

して存在する《事物のコピー》にしてしまう。⁽²⁹⁾これは心的イメージについて言われているのであるが、心的イメージと同様にイメージの本質をそなえている物的イメージ(写真や絵画)について考えればよくわかる。(実際、内在論的錯覚は、写真のような対象物が意識の中にあるとみるのである。)ここで「イメージとはすなわち対象物である」と誤解を招きそうな表現がなされているが、これは一枚の肖像写真を見せられた時に口に出る「これ(イメージ)はAさん(対象物)だ」という発言に対応する。それが「イメージと対象物の本質の同一性の確認」である。そして、そこからAさんのイメージが対象物として写真の上に存在すると錯覚するのが、「存在の同一性の確認」であり、とりもなおさず、擬物論的錯覚である。かかる事態が心的イメージについても起こるのである。写真の上に対象物としてのイメージが事物のように即自的に存在しないのは明らかであろう。写真の上に即自的に存在するのは灰色の斑点模様であり、それは焼きつけの具合を調べるカメラマンの知覚の対象物である。物的イメージが対象物として即自的に存在しないことは、ゲシュタルト心理学の反転図形や、近くで観る場合と遠くから観る場合とで全く異なるイメージが生まれるダリのだまし絵の例を考えれば、更にわかりやすいであろう。そして、イメージは対象物として存在するという錯覚から解放されて、イメージの意識について反省してみれば、イメージは意識の作用であると結論される。

『イメージネール』は、「イメージはひとつの意識である」という『想像』の結論から出発する想像意識の現象学である。サルトルは『イメージネール』において、「反省的記述に基づく想像意識の本質の把握、およびそれに基づく想像意識の分析を行なっている。対象物に関係するしかたの相異によって、反省作用が意識を知覚・想像・概念という三つの型に弁別することに基づいて、サルトルは知覚および概念と峻別されるものとしての想像意識を問題

の対象とする。さて、想像意識はひとつの意識であるのだから、何ものかについての想像意識である。想像意識の対象物が意識に内在的なイメージであるという考えをサルトルが否定することは既に見たとおりである。サルトルによれば、ひとつの事物についての知覚意識および想像意識の対象物は異なるものではなくて、同一のその事物である。「私がこの椅子を知覚するにせよ想像するにせよ、私の知覚の対象物と私のイメージの対象物とは同一である。それは私が腰かけているこのわらの椅子である。……意識の或るひとつの型、すなわち現実に存在する椅子に直接に関係するひとつの総合的組織が問題になっているのであり、その総合的組織の本質はまさしく現実に存在する椅子に何らかのしかたで関係することである。」⁽³⁰⁾ここでは現実に存在する対象物についての意識が、一具体例としてとりあげられたのであって、想像意識の対象物は存在するものであると、言われているのではない。現実に存在しないキマイラやケンタウロスも想像意識の対象物となり得るのであるが、対象物が現実に存在するか否かの差違は想像意識にとつて本質的な差違ではないとサルトルは考えている。ここで言われていることは、知覚の対象物である現実に存在する対象物が意識の中に這入って来ることができないのと同様に、想像意識の対象物も意識の中に這入って来ることができないということである。すなわち《想像意識の対象物は超越的である》ということの意味している。現実に存在する椅子もケンタウロスも超越的对象物であつて意識に内在的ではない。ここで言われているいま一つのこととは、知覚から想像を区別するものは、対象物の相異ではなくて、対象物に関係するしかたすなわち措定作用の相異であるということである。

対象物を現実に存在するものとして措定する知覚から区別して、サルトルは、「想像意識はその対象物を無として措定する。」⁽³¹⁾と言う。そして、想像意識の措定作用の四形式を分析する。「その作用は、対象物を、現実に存在

しないものとして、あるいは不在のものとして、あるいは他所に現実に存在するものとして、措定することができる。またその作用はそれ自身を《中和する》ことすなわちその対象物を現実に存在するものとして措定しないことのできる。⁽³²⁾ ちなみに、概念と想像との区別について言えば、概念作用は対象物の本質あるいは意味を措定するのであって対象物そのものを措定しないのに対して、想像においてはその対象物が「準観察」と名づけられる「直観的相」のもとに与えられる。

想像意識の対象物は非現実的対象物である。想像意識は非現実的対象物へ向かつての超越である。「一般に、非現実的であるのは対象物の素材のみではない。対象物が従わせられている空間規定・時間規定はすべて、この非現実性を帯びている。」⁽³³⁾ すなわち、非現実的対象物は、現実的なものの世界の秩序に属しておらず、これを超越している。ところで、「想像意識は、その対象物を無として措定する」と言われたのであるが、このサルトルの「無」を積極的な意味に解してはならない。無は即自的なものではあり得ない。無は存在の無でしかあり得ない。サルトルは、「無の把握は直接的な開示によつてはなされ得ない。」⁽³⁴⁾ あるいは「無は何ものかの下部構造としてしか与えられ得ない。」⁽³⁵⁾ と言う。すなわち、無が体験されるのは、想像意識が現実的なものを世界を超えて（これを否定して）非現実的対象物に向かつて自己を超越する時のその否定作用においてであるということであろう。したがって、想像意識は非現実的世界を彷徨するのではない。サルトルは、「非現実的世界は存在しない。」⁽³⁶⁾ と言う。反対にサルトルは、「非現実的なものは、……自らが否定するこの世界の地^じの上につねに構成されなければならない。」⁽³⁷⁾ と結論する。かくして、非現実的対象物は超越的なものであり、想像意識は世界の否定における世界への超越であることになる。

自我の超越性。——非反省的水準における対象としての心理∥物理的な自我が超越的なものであるのは言うまでもない。これは私にとつても他者にとつても超越的な対象である。一方、諸々の近代哲学において考えられている意識の中あるいは背後に存在すると考えられた「我れ」について言えば、そのようなものは存在しない。意識を統一しているものは、超越の対象であり、意識それ自身の時間的統一である。「我れ」とは内面性の表現にすぎない。存在する「超越論的我れ」が意識を統一しているのではない。意識は純粹な自発性であつて、非反省的意識は、超越の対象についての意識であり且つそれ自身についての非措定的意識であり、そこには「我れ」など存在しない。「我れ思う」が現われるのは反省的意識に対してであつて、「我れ」とは、反省的水準に現われる心的な対象物である。それは、超越的な対象物である。

サルトルの自我の超越性についての考えを短かく要約すれば、以上の如くである。サルトルから見れば、意識の中に「自我」を持ちこむ哲学は、意識に受動性と不透明性を附与して、意識を破壊する擬物論的錯覚に陥つてゐるのである。サルトルは、自我の超越性を主張し、「超越論的領野」⁽³⁸⁾を純化して、「超越論的領野」は「無」であると結論する。

以上見て来たように、サルトルは、意識の中に意識の対象物が存在するとなす擬物論的錯覚、意識の内部にあるいは背後に自我が存在するとなす擬物論的錯覚を却けて、意識を純化してまったく透明なもの無であるものとして規定したのである。意識とは、端的に言えば《超越》であり、超越の対象物に対する関係である。そして、サルトルは、人間的現実の存在論的分析において、対自存在を即自存在の否定と、すなわち意識を存在の無と、規定した。サルトルの哲学の根本概念である「意識の指向性」の概念は「超越」の思想を含意するものであり、「超越」は意

識が世界に対する否定的関係であることを意味するものであった。そして、この「超越」という否定的関係こそが「原初的な」⁽³⁹⁾ものであるというのが、サルトルの主張である。サルトルの哲学は超越の哲学である。

現象が要求する存在の超現象性を認めなければ、内在論的錯覚に陥るであろうし、二つの超現象的存在をそれぞれ即的に孤立して存在するものと見るならば、擬物論的錯覚に陥るであろう。具体的なものは、《人間||世界》という一対であり、関係である。関係項の各々を実体化したり、あるいは関係項の一方を実体化して他方を相対化したり、あるいは関係項の一方を消去したりして来たのが、共通して擬物論的錯覚に陥った近代哲学の歩みであった。サルトルの豊かな「人間的現実」の存在論的分析は、かかる近代哲学の超克の試みである。

注

- (1) 初期著作においてはフッサールにならって「超越論的領野」「超越論的意識」という言葉が出て来るが、「領野」は空間を予想させるし、「超越論的」は多分に認識論的用語である。『存在と無』では使われない。
- (2) J.-P. Sartre, *L'être et le néant*, Gallimard, p. 20.
- (3) *Ibid.*, p. 20.
- (4) *Ibid.*, p. 115.
- (5) Cf. *Ibid.*, p. 115.
- (6) *Ibid.*, p. 27.
- (7) J.-P. Sartre, *Situations I*, Gallimard, p. 31.

サルトルはフッサールの現象学にこの名称を与えたのだが、この名称はむしろサルトル自身の存在論に与えられるのにふさわしい。

- (8) *L'être et le néant*, p. 17.
- (9) *Ibid.*, p. 19.
- (10) *Ibid.*, p. 20.
- (11) *Ibid.*, p. 22.
- (12) *Ibid.*, p. 23.
- (13) *Ibid.*, p. 12.
- (14) *Ibid.*, p. 14.
- (15) *Ibid.*, p. 16.
- (16) *Ibid.*, p. 25.
- (17) *Ibid.*, p. 27.
- (18) *Ibid.*, p. 27.
- (19) *Ibid.*, p. 27.
- (20) *Ibid.*, p. 28.
- (21) *Ibid.*, p. 29.
- (22) サルトルにおいては、指向関係も存在関係のひとつであり、その根源的関係である。
- (23) M. Contat et M. Rybalka, *Les écrits de Sartre*, Gallimard, p. 71.
- (24) *Situations I*, p. 29.
- (25) J.-P. Sartre, *L'imaginaire*, Gallimard, p. 15.
- (26) *L'être et le néant*, p. 63.
- (27) J.-P. Sartre, *L'imagination*, P. U. F., p. 162.
- (28) *L'imaginaire*, p. 15.
- (29) *L'imagination*, pp. 3—4.

- (30) *L'imaginaire*, pp.16—17.
- (31) *Ibid.*, p. 23.
- (32) *Ibid.*, p. 24.
- (33) *Ibid.*, p. 163.
- (34) *Ibid.*, p. 238.
- (35) *Ibid.*, p. 237.
- (36) *Ibid.*, p. 171.
- (37) *Ibid.*, p. 236.
- (38) Cf. 註 (1)°
- (39) 「二つの存在領域の関係は、一つの原初的な湧出であり、これはそれらの存在の構造そのものの一部をなしている。」
(*L'être et le néant*, p.38.)

* 引用の訳文に関しては、多くの場合、人文書院版サルトル全集を使用した。

(大学院学生)